三嘆シテ遙ニ躋バ、本堂ノ庭ニ、十圍ノ花木四本アリ、此下ニ一丈餘リノ鍮石ノ花瓶ヲ鑄懸テ、一雙ノ華ニ作リ成シ、其交ニ兩圍ノ香爐ヲ兩机ニ並ベテ、一斤ノ名香ヲ一度ニ炷上タレバ、香風四方ニ散ジテ、人皆浮香世界ノ中ニ在ガ如シ、其陰ニ幔ヲ引、曲彔ヲ立雙テ、百味ノ珍膳ヲ調ヘ、百服ノ本非ヲ飲テ、懸物如山積上タリ、

〔建内記〕文安四年四月廿五日、向淨花院、依招引也、飾方丈、有點心、有回茶、出珍物、取孔子、其體盡風流、其興添風味、今度數日列行無爲之儀、自他大慶也、

〔筆のすさび中〕三谷丹下は、後に宗鎭と改名す、名良朴、南川と號し、又不偏齋ともいふ、原叟の弟子にて、四天王と呼びし一人なり、〇中略藝侯へ召るゝ時に、茶道坊主同格なればまゐらずと云につけ、儒者格にて召るゝにより、承知して往きし人なり、千家の茶敎に七事といふ事を習はす内に、茶歌舞妓といふ事ありて、十炷香の式に倣ひて、茶を呑わけ利事を主とせり、さかるに良朴この茶歌舞妓といふ名の譯もなき名と、且卑俗に聞ゆるを嫌ひ、同藩の堀南湖先生に議して、一種闘茶と云事を編出し、その家にては茶かぶきは不用、そのかはり闘茶を敎ゆ、

闘茶

蔡忠惠茶錄云、建安闘試以水痕先者爲負、耐久者爲勝、故較勝負之說曰、相去一水兩水、此闘茶之由也、谷南川講茶禮者、其闘茶會約有試茶、有較茶、每茶一服、分其香氣味、蓋與香式相爲表裏、別自有所傳準、而原蔡氏、揭闘茶二字、以告其社友、乃其賞會標置、爲茗仙家生一色、請余作詩、

闘茶傳舊法、心賞輙開場、覆中品初定、不須問蔡襄、

元文己未年〇四九月後一日南湖堀正修題

茶品

〔茶道筌蹄一〕茶師幷茶名

茶名　初昔は慶長の頃より始る、むかしは白といふ製にて有しが、中頃より青といふ製になり